ようこそ校長室へ！

Ｎｏ．105
令和７年１月７日
発行 ： 貝 塚 敦

に にこにこ笑顔で い いつもみんなで つ 紡ぎ繋げる心で に 日本一をめざすのだ

めでたし めでたし？

「ボクのおとうさんは、桃太郎というやつに殺されました。」

小さな子どもが書いたような字の下に、涙を流す健気（けなげ）な鬼の子どもの絵が描かれ、その下に小さな字で「一方的な『めでたし、めでたし』を生まないために。広げよう、あなたがみている世界」とのコメントが掲載されているこの画は、2013 年の「新聞広告クリエ―ティブコンテスト」で 1000 を超える応募作品の中から最優秀賞に輝いた作品です。

「新聞広告クリエ―ティブコンテスト」というのは、一般社団法人日本新聞協会が 2002 年度から 2021 年度まで主催していたコンテストで、その年その年でテーマが設定され、そのテーマにそって、国内外のプロ・アマを問わない多くのコピーライター、アートディレクター、映像クリエーターなどが新聞広告作品を応募するといった、その業界・専門分野ではつとに有名なコンテストでした。

入賞作品はネットでも公開されています。毎年毎年どの作品も、その独創性、ユーモア、メッセージ力、アイデア等々にうなるばかりの秀逸な作品ばかりです。その中でも、「しあわせ」というテーマでの 2013 年に、この「めでたし、めでたし？」という題名で最優秀賞に輝いたこの作品は、例年にない衝撃的な作品として世間でも大きな注目を浴びました。

例年、この作品以外にもユニークでいろいろ考えさせられる作品が多いので、私は、この「新聞広告クリエ―ティブコンテスト」自体を過去の校長講和の題材にしたくらいです。奇しくも昨年 12 月 24 日に、全校生徒に生き方講和をしてくれた小田敏三元新潟日報社

長もこの作品を話題にしました。何と、氏は当時このコンテストの審査員の一人だったとのこと。なるほど、日本新聞協会主催のコンテストですから納得です。

この作品の作者は、次のようなコメントを添えています。
「ある人にとって幸せと感じることでも、別の人から見ればそう思えないことがあります。反対の立場に立ってみたら。ちょっと長いスパンで考えてみたら。別の時代だったら。どの視点でその対象をとらえるかによって、幸せは変わるものだと考えました。そこで、みんなが知っている有名な物語を元に、当たり前に使われる「めでたし、めでたし」が、異なる視点から見ればそう言えないのでは？ということを表現しました」と。

この作品を中学校の道徳の授業の題材として活用している先生が多いと聞きます。私もかつてそうでしたし、昨年度当校でも実践している先生がいました。
決して、先入観や偏見にとらわれず、ものごとを多面的・多角的に考えること、いろいろな立場や価値観や広い視野でものごとをとらえることが大切な道徳の授業には好題材だと考えます。

もう一つのエピソードを。
前任校の新潟テルサで実施した合唱コンクールで、スペシャルゲストとして、ウクライナ出身のバンデューラ（ウクライナの民族楽器）奏者であるカテリーナさんという方にオープニングでの演奏会をお願いしました。
そして、せっかくの機会だったので、私も恥ずかしながら、清水の舞台から飛び降りるつもりで、開会の挨拶代わりにと、付け焼き刃で練習したピアノの演奏をしました。
その時弾いた曲は「ともしび」。かつて倍賞千恵子さんやボニージャックスが歌って大ヒットした、ソビエト連邦時代に第二次世界大戦での戦地に赴く若者と恋人の離別を題材にした「ロシア民謡」に日本語の歌詞をつけた名曲です。
折しも、ロシアとウクライナとの戦争が勃発して緊張状態が続いていた時期。一刻も早い戦争の終結と平和への願いを込めた、ウクライナ出身の一流のプロの音楽家と、ど素人の私の共演？による演出は、それなりに会場の生徒や保護者にも好評を得たものと受け止めたのですが・・・・。

翌日、教育委員会から私に予期せぬ電話。「ある生徒の父親からクレームの電話が教育委員会宛にありました。戦争の首謀国、侵略側であるロシアの楽曲を校長が全校に披露したとはけしからん。自分の娘がショックを受けて帰ってきた」と。びっくりしました。
カテリーナさんと事前に打ち合わせた平和への願いを込めた演出であり、その意図も会場のその場で全校生徒に伝えたはずなのですが、こちらの真意が生徒に伝わらなかったことよりも、そういう風に受け止めるナーバスな子もいるのだと。なるほど、人によっていろんな受け止めがあるものと、そこまで考えが及ばなかった自分の浅はかさを深く反省した次第です。

さて、2025年が幕を開けました。あらためましてあけましておめでとうございます。皆さん一人一人に幸多き１年になりますことを心から祈念しています。ただし、自分一人だけの『めでたし めでたし』ではなく、自分以外のいろんな人にとっての『めでたし めでたし』になる１年になることを願うばかりです。
何が真実で何が偽りなのか、どれが正しくてどれが間違っているのか、どちらが善でどちらが悪なのか、何が正義で何が邪悪なのか、どちらが表でどちらが裏なのか、いろんな見方・考え方から本当の幸せを判断できるように。

それにしても、「桃太郎」という有名な物語を、日本人だったら当たり前のように誰でも知っている昔話だと私は思っているのですが、このことも大いなる先入観なのかもしれません。今の中学生の中にも知らない人がいるかもしれません。いずれ世間一般からも忘れ去られてしまう、本当の意味でのおとぎ話になることだって考えられます。
そして、常に物事を斜めからばかり見ようとする性質(たち)の私のような人間にとって、おとぎ話って突っ込みどころ満載ですね。なんで、たくさんいる動物の中で猿と犬とキジなんだ？　キビ団子なんてどんな団子なんだ？　そんな命をかける仕事についていくほどの価値のある食べ物なのか？　同じ甘いものなら、せめて団子よりはアイスキャンデイの方がいい。そう、アイスキャンデイなら何と言っても「もも太郎」に限る、と。(因みに、アイスの「もも太郎」は「桃太郎」と何の関係もありません。「もも太郎」は、その昔、桃の型枠で氷菓子を作ったことに由来するそうです。)

　こんなどうでもいいくだらないことばかりいつも考えていて、常にひねくれた穿（うが）ったものの見方しかできない私も、長年周囲からいつもいつも『鬼』扱いされてきました。

　おまえは天下一品の、「天邪鬼（あまのじゃく）」だと。